地方小出版 情報誌 アクセス

毎月1回　1日発行
購読料　定価150円（本体136円）
年間1,500円（税込み）
振替　00120-0-19017

発行所　㈱地方・小出版流通センター　〒162-0836　東京都新宿区南町20
編集　アクセス編集委員会　TEL.03-3260-0355　FAX.03-3235-6182

追悼・“数独の父”鍛治真起さん

「気前のいい後輩」の死を悼む ――///★

文／無明舎出版・安倍 甲

鍛治真起さんが亡くなった。享年６９、私より２歳年下だ。年下の友人の死はけっこうこたえる。

鍛治さんはパズル制作会社「ニコリ」の創業者で、世界的に大ヒットした「数独」の名付け親として知られる。

亡くなる数日前、地方小の川上社長から、「ニコリの社長を辞し、がんのために入院治療中のようです」とメールをいただいた。実際のところは自宅療養中だったようだが、仕事の後継者をちゃんと決めてから入院というのも彼らしい、とその時は深く考えもせず聞き流した。そのわずか数日後、『「数独」の名付け親、死去』というニュースが世界中で報じられた。パズル制作会社とはいえ出版業界の一員でもあった鍛治さんの死が、ＣＮＮやニューヨーク・タイムズといったワールドワイドなメディアで世界中に流れたことには、不謹慎かもしれないが少し誇らしい気持ちにもなった。

＊

生前、鍛治さんとは何度か一緒にお酒を呑んだ。何もかも自分とは正反対のキャラクターで、そのお互いの「違い」が面白かったのか、50代の働き盛りに交友は続いた。

出会いはもう覚えていない。たぶん地方小の川上社長が「面白いやつがいるから会ってみないか」と誘ってくれたのだと思う。80年にパズル制作会社を創業して、そのパズル雑誌の営業を16年間、直販で貫き通したという経歴にまずは興味ひかれた。当時パズルというのは出版の世界では市民権も得ていなかったが、ニコリ創刊とともにファンが増え続け、それが衰えることなく続いていた。雑誌

【ニコリ176号（2021年秋号）】2021.9ニコリ刊／本体価格1000円／ISBN978-4-89072-676-9

「ニコリ」は最初季刊だったが、実際は不定期刊だったそうだ。店頭に並んだ時が発売日というユニークさも話題になった。でもそうした表層的な話題より、パズルそのもののレベルの高さ、マニア受けする手づくり感が、日々ファンを増やし続けていた要因だったようだ。

とはいっても私自身、パズルには全く興味がなかった。鍛治さんも地方出版の世界などにはまるで興味は抱いていなかった。だから会って呑んでも、お互い仕事の話をすることはほとんどなかった。

あるとき「競馬をしたことがない」と私がいいだしたら、翌週、大井競馬場に連れて行ってくれた。調子に乗って「銀座の高級クラブも行きたい」と甘えたら、それもすぐに実現してくれた。

一緒にニューヨークの国際ブックフェアーにも行った（彼はラスベガスで途中下車、会場には最終日にやってきた）。秋田新幹線が開通した折は、その開業記念パズルをつくるため来秋したので、２泊３日で秋田を案内した。ちょうど横手市に競馬のサテライトできたばかりで、彼は新幹線よりもそのサテライトが気になり、やはり途中下車して、サテライトに入り浸っていた。

何もかもが自分とは正反対のキャラクターだったので、理解不能なことも多かったが、自分の知らない世界をたくさん教えてくれた「気前のいい後輩」という感じの友人だった。

＊

鍛治さんは1951年、北海道札幌市生まれだが、じぶんから北海道の話をすることはなかった。育ったのは東京で高校時代には硬式テニス部に所属、国体にも出場している。慶応大に進学したが70年安保の時期、２年半で中退している。このへんは自分ともちょっと似た経歴なので、互いにシンパシーがあったのかもしれない。

その後、印刷会社で働いていたときに目にした米国の雑誌に掲載されていた数字パズル「ナンバープレース」が数独へのヒントになった。

80年に友人とパズル雑誌「パズル通信ニコリ」を創刊し、83年にパズル制作会社「ニコリ」を設立、社長に就任している。今年７月末に体調が悪化するまで、長きにわたって社長を務めつづけた。

鍛治さんの名前を世界的にした「SUDOKU」という単語は、英オックスフォード英語辞典にも収録されている。ニューヨーク・タイムズは鍛治さんを「数独のゴッドファーザー」と紹介している。

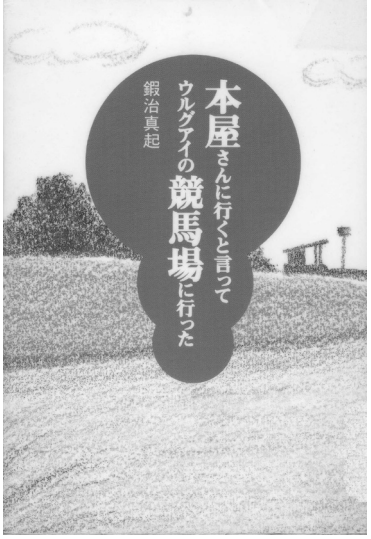
数独（ナンバープレース）の創案者は

米国人建築家ハワード・ガーンスという人物だ。米国のパズル雑誌「Dell」が79年に紹介したガーンスの数字パズルに感銘を受けた鍛冶さんが、83年に自身が創刊した「パズル通信ニコリ」にそれを紹介したことにはじまる。１～９の数字を重複しないようにマス目に入れるパズルで、「数字は一定領域内で重複できない」という規則がある。縦横９列の正方形のマスに、同じ列や縦横３列のブロックで重複させないように１～９の１桁の数字を入れ、最初からマスに数字が書かれている「ヒント数」は中央のマスを軸に対称形に配置する。これは鍛冶さん独自に発案したもののようだ。実際にやったことのない私には説明されてもよくわからなかったが、「数字は独身（シングル＝１桁）に限る」という意味から「数独」という名前を鍛冶さんは思いついたのだそうだ。

しかし最初から数独が世界で受け入れられたわけではなかった。いやヒットまでには長い歳月がかかっている。国際的に注目されるようになったのは2004年のことだから、ニコリ創業から約20年後だ。日本を旅行中にニコリのパズルに夢中になったニュージーランド人が、ロンドン滞在中にそのパズル（数独）を英紙に売り込んだのだ。「数字」は万国共通だ。出版するにも言葉の壁はない。またたく間に「数独」は世界へと広がった。最初にイギリスで爆発的に広がり、米国や世界100ケ国余で新聞や雑誌に掲載されるようになるまで時間はかからなかった。06年からは数独の世界選手権まで開催されるようになったという。

＊

1997年、鍛冶さんは『本屋さんに行くと言ってウルグアイの競馬場に行った』（波書房）という本を出版している。中身は５章立てで、ニコリ創業の顛末と競走馬「ニコリ」を追いかけたドキュメントが交互に語られるノンフィクションだ。いま改めて読み返してみると、前に読んだときとは違った印象が強く、新たな発見も少なくなかった。面白かったのは「パズル雑誌を作ろう」という秀逸なアイデアを出したのが実は鍛冶さんではなかったことだ。大学を中退後、印刷所で働いていた時、そこで、まりとめい子という姉妹がいい出したことだったのだ。「へいわ印刷」という20人程度の小さな印刷所で、まりとめい子の父親の



【本屋さんに行くと言ってウルグアイの競馬場に行った】鍛治真起 著／1997.1　波書房刊（品切中）／ISBN978-4-8164-1243-1

清水さんが「へいわ印刷」の社長だ。鍛冶さんの弟とまりさんが幼稚園の同級生だった関係で、母親同士が仲良かった。だから鍛冶さんと姉妹は「幼なじみ」ということになるのだが、実際に一緒に遊んだことはない、と鍛冶さんは書いている。

大学を中途退学し、就職した先は母親同士が親交のある印刷所で、「幼なじみ」の姉妹との出会い、それが鍛冶さんの運命を変える。めい子は鍛冶さんより２歳年上で、まりは２つ年下だった。

「私は一度でいいから、雑誌を作ってみたかった。自分のアンテナで好き勝手な紙面にして、ゴッタ煮だが主張のある、つくり手の顔が見えて、威勢のいい元気な雑誌……」と鍛冶さんは思っていたのだが、いとも簡単にこの姉妹の「パズル雑誌がいい」という提案に屈してしまうのだ。このへんの優柔不断さも鍛冶さんらしい。

＊

鍛冶さんを語るとき、パズルという一面だけでは理解できないことが多い。本の書名にもなっている「競馬」も重要なファクターのひとつだ。この両面を見なければ彼の全体像は見えてこない。

鍛冶さんは72年から馬券を買いはじめている。競馬場は居心地がよかった、という。自分は何をしたいかまるで分らず、怠惰な毎日を送っていたが、競馬場に行くと身体がシャキッとなり、ドロリとした生ぬるい空気がレースによって突然張り詰め、興奮した。こここそが自分の居場所だと確信したという。

そして翌年（７３年）、あっさり大学をやめている。

「ニコリ」という誌名や会社名はイギリスの競走馬の名前だ。ある朝、浜松町にある喫茶店でスポーツ新聞を読んでいたら競馬欄の三行記事が目に入った。「今週行われるイギリスのダービーの一番人気馬はニコリ」。これだ、と思った。カタカナの字面がきれいで、ひびきもいいではないか。ニコリは黒鹿毛の競走馬で1977年アイルランド産。鍛冶さんは「ニコリ」という雑誌名や会社名を、実際に見たわけではない競馬新聞の馬の名前から直感で決めたのだ。このいい加減さも鍛冶さんの真骨頂だ。

そして９５年、そのニコリがウルグアイで種牝馬として生きていることがわかり、ウルグアイまで会いに行く。ニコリは「鹿毛の堂々とした馬だった。種牝馬にしてはすっきりとした馬体だった。生きていた。立っていた。撫でた。首筋を撫でた。来たよ。二の腕を噛まれた。痛くなかった。（略）今までのお前の人生を聞きたい。オレも十五年間のことをすべて話したい。ニコリは、日本でも子どもを産んだ。小さな会社をひとつと、世界に誇れる雑誌を」と珍しく抒情的に、自分の感情をニコリを前にうたいあげている。

ウルグアイ旅行後も、今度はニコリを産んだ人たちに会いたくなり、翌年にはニコリの生地、アイルランドの牧場と、ニコリが５歳になって渡ったケンタッキーの牧場を訪ねている。競馬好きだが馬券好きであって血統には興味ないという鍛冶さんには意外な展開だが、「取材というより、残したいというより、自分の落とし前としてここにいる。ニコリを知りたい、という欲求だけでここにきている」と心情を吐露している。

＊

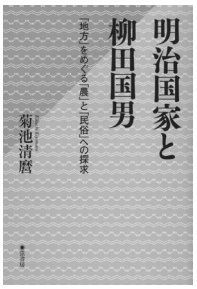
鍛冶さんはいつも飄々として、風のように生きていた。時に洒脱な芸人のようでもあり、ときに粋で頑固なギャンブラーでもあった。私にとって自分の知らない領域の世界をいろいろ見せてくれた恩人である。安らかにお休みください。

（あんばい　こう・無明舎出版舎主）

新刊ダイジェスト

表示されている値段は本体価格となっております。ご購入には別途、消費税がかかります。

『明治国家と柳田国男 ー「地方」をめぐる「農」と「民俗」への探求』●菊池清麿著



近代農政学を軸に日本農業に深く関わってきた明治国家官僚・柳田国男にとってその民俗学の構想は、彼の開明的な農政思想の挫折から生じたものだったのか。著者は柳田において農政学から民俗学へという思想展開は連続的で必然的なものであった、と言う。そこには断絶や飛躍はない。近代経済合理性としての農政学から反近代的手法としての民俗学へ。この道筋はどのようにして展開されたのか。本書はその過程を詳細に追う。

日本の近代化は、文明開化という論理に従って、政府主導の殖産興業による資本主義の育成、立憲制の導入という外形的側面が強調され、下からの内発的発展が軽視された。近代化に必要なエートスである自由・平等・合理主義の受容も十分には浸透しなかった。このような日本近代の特殊性の中にあって、柳田国男の農政学は、封建的生産関係を温存、維持、停滞している日本の農業構造を経済合理性によって近代化の過程に導こうとしたのであった。その主要な手段として構想されたのが、資本の分配と供給によって農業経営の合理化、規模拡大を可能ならしめる「産業組合」である。それは輸入された近代農政学の杓子定規な当て嵌めではなかった。あくまで地方の特殊事情を包括しながら、地方が主体となり自助尊重の理念によって自立自営するための、近代農業への土台となるはずのものだった。この中農養成論の背景にあるのは、経世済民の理念による国民総体の幸福といった農政思想であった。しかし明治四十年代、形式的な近代化への反省から国家再編運動として展開された官製の「地方改良運動」は、町村合併や神社合祀政策、勤勉倹約孝行といった前近代的通俗道徳の奨励等々、「地方」の実情・特殊性を汲まない冷淡なものでしかなかった。このような机上の政策思考に対する疑義と批判から、「地方」、すなわち微視的な歴史的沿革や習慣体系や心意現象、固有信仰の複合である「地方」を内在的に掬い上げる民俗学は必然的に構想されたのである。この見地からすれば柳田の『後狩詞記』『石神問答』『遠野物語』といった民俗学的初期作品は、「地方」をめぐる明治国家の正統に対する非政治的な民俗思想からの批判であるということになる。

この民俗学へと至る思想展開の必然性を追うにあたって著者が重視しているのが、柳田国男の生い立ちに見られる身体的感受性という契機である。著者が、本書の第1部にあたる「明治国家官僚への道」において柳田国男の生い立ちに多くのページを割いているのはこのためであろう。

（U）

◆ 2400円・四六判・358頁・**弦書房**・福岡・202108刊・ISBN9784863292307

『平田篤胤 ーその思想と人生』●渡部由輝著

本書は、荷田春満（かだのあずまま ろ）、賀茂真淵、本居宣長とともに国学の四大家の一人に数えられ、「復古神道」を鼓舞して幕末期における時代精神に大きな影響を与えたと目されている平田篤胤の伝記であるが、これがすこぶる面白いと思わされるのは、ひとえに著者のその方法による。著者は平田篤胤の内在的思想をただ追うよりは、それを常に時代の風潮や慣習や経済社会状況との関連の中で捉えようとしている。だから一見篤胤とは何の関係もないと思われる、その時代を象徴するようなエピソードにも度々言及するのである。例えば、無一文で二十歳の篤胤が江戸社会に流れ着いた頃の記述では、呉服屋の風呂番として篤胤が働いていたことに言及しているが、当時どの職種でも大店は店頭売りよりも訪問販売が主であったという。江戸期、所得税類はなく固定資産税だけだったので、なるべく店舗は小さくし、訪問販売を主とする方が税金的に有利だったからだ。そこで大勢の店子が訪問販売から疲れて帰ってきたときのために大店には専用の風呂場があった。そして、専属の風呂番も重宝されていたのである。風呂番はいったん火をつけるとあとはその番をするくらいしか用がない。篤胤にとって、本を読む時間を得るにはうってつけの仕事だった、というわけである。当時の呉服屋への課税事情が、風呂番をしながら読書する若き篤胤の姿と重なり合うところがとても面白い。さらに篤胤思想の柱の一つである幽冥論を記述するにあたっては、まるまる一章を費やして、当時の江戸社会における一般的異界認識がどのようなものであったかを、様々な資料を引用しつつ解説している（第四章「異界はいずこに」）。たとえば、明治時代初期に日本国内を旅した英国女性旅行家のイザベラ・バードは、その時雇った日本人人夫の誠実さと純良さを賛嘆しているが、一方で彼らが未開人のように夜の闇を異様に恐れるのを興味深く見ていたという。明治になっても日本の庶民の感覚では、百鬼夜行のイメージに見られるように、夜は異形の物の怪たちが辻々で跋扈する時間として観念されていたのである。また著者は当時の日刊紙である瓦版などを紐解き、不可解な子どもの行方不明事件である〈神隠し〉が頻繁に起こっていたことを取り上げている。さらには当時の都市伝説集である『耳袋』等から怪異譚の数々を引用している。それらの資料の中には荻生徂徠の『徂徠学案』といった、江戸期には最先端と目されていた知識人による著書も含まれる。つまり知識人も官僚も含め、当時の日本人には〈異界〉はすぐ身近にあったということである。このような社会の土壌から篤胤の主著である『霊能真柱』や天狗小僧寅吉の異界訪問録『仙境異聞』、子どもの生まれ変わり譚『勝五郎再生記聞』は生みだされていった、ということなのである。（N）

◆ 1800円・A5判・182頁・**無明舎出版**・秋田・202107刊・ISBN9784895446686

『ゾンビハムスターねずこ』●嵯峨山高弘：絵 / 原田たけし：著

ある夜、小学２年生の主人公ヒカルくんが寝ているときのこと、夢うつつで何やらふとんが重い…と思っていたら、死んだときお墓に埋めてあげたはずのペットのハムスター・ねずこが突然まくら元に…その姿といったら、生前の可愛らしさはどこへやら、顔のいたるところに縫い目があるし、からだには血の付いた包帯を巻いているみたいだし、白目は不気味に血走っているし、まさにゾンビそのものといったふうで、ヒカルくんは思わず「うわあああ!!」と叫び声をあげてしまうのでした。「ヒカルくん、そんないこわがらないで！」というねずこ。なんでも、生前は太りすぎるからと一日一粒しか食べさせてもらえなかったヒマワリの種を思いっきり食べてみたかったんだ！とのこと。そんな未練がねずこをゾンビにして蘇らせてしまったらしい…ヒカルくんは、ゾンビなら食べ過ぎても問題ないよな！とたくさんのヒマワリの種をねずこにたべさせますが、ほほ袋が腐っていてそこからポロポロとヒマワリの種がこぼれてしまうのでした。2014 年の絵本デビュー作『小学生のボクは、鬼のようなお母さんにナスビを売らされました。』（発売：インプレス）が代表的なネット書店でランキング１位に輝き、フジテレビ『軌跡体験！アンビリバボー』や日本テレビ『世界一受けたい授業』などで特集されて「エグいけど泣ける」と評判となった著者による最新絵本。次の晩から何度も何度もヒカルくんのまくら元にやってくるゾンビハムスターねずこが、子どもたちに伝えたかったことは…（M）

◆ 1400 円・Ａ４判・32 頁・**リーブル出版**・高知・202108 刊・ISBN9784863383098

『地域マネジメント －地方創生の理論と実際』●吉田雅彦著

" 地元を良くしたい "、その土地に住む人なら誰もが思う素朴な気持ちだ。地方創生、地域振興、地方活性化の言葉は、1970 年代後半から急速に広まった。しかし、それは容易なことではなく、思いつきや奇抜なアイデアだけで成果を定着させることはできない。

筆者は大学で経済学を学び、通産省に入職して関東経済産業局や出向した秋田県などで地域経済産業・中小業政策、製造業対策に関わって地域振興・活性化に参加し、宮崎大学地域資源創成学部に転じてからは観光みやざき創生塾長を務めている。その豊富な実践体験から、持続可能な地域をつくるには、経営学・マネジメントの知見を行動に結びつけていくことが必要であると考える。マネジメントとは経営戦略とマーケティングである。島根県海士町のさざえカレー、北海道上士幌町のエゾシカ肉販売など地域資源の活用に始まる試みに共通することは、雇用と利益を継続的に得る努力、若者のUJI ターン、子育て・教育への大胆な投資、経営マインドのある首長のマネジメントへの長期コミット、そして何より地元住民の熱い思いと信頼関係である。マネジメントの根幹が「人を通じて仕事をうまく成し遂げることである」であることがよく分かる。

CDVID-19 で景気の落ち込む今、拡張した業態を本業に戻した宮崎県「はまぐり碁石の里」の経営転換も示唆に富む。様々な取り組み事例を経営理論で裏付けした、行動のための啓蒙書である。（飯澤文夫）

◆ 2500 円・Ａ５判・201 頁・**鉱脈社**・宮崎・202106 刊・ISBN9784860617912

『奄美の自然入門』●常田守著

「奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島」の一部として世界自然遺産となった奄美大島と徳之島。本書は奄美大島を中心に両島の自然について様々な視点から伝えてくれます。

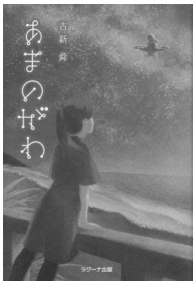
そんな奄美の自然の特徴のひとつは固有種の多さです。よく知られたアマミノクロウサギのほかにも、「Ｙ染色体」を持たないのに雌雄の区別があるというアマミトゲネズミにトクノシマトゲネズミ。すっくと背筋を伸ばした姿のアマミハナサキガエルなど両生類にも多くの固有種がいますし、昆虫や植物もまた然りです。奄美の森に入り浸るふたりの著者が写した写真も美しく、彼らの生き生きとした姿を捉えています。しかしそんな自然が残る奄美の森の多くは手つかずの森ではありません。島の人々は古くから山に入ってきました。世界自然遺産となるくらいの貴重な自然が人々の暮らしのすぐ隣に存在するというのも、奄美の自然の特徴のひとつです。そのため世界自然遺産になってもその保全には不安もつきまといます。希少な植物の盗採や昆虫の密猟、ロードキルと呼ばれる動物の轢殺は直接的な脅威です。

そして世界遺産目当ての観光客を呼び込むために、世界遺産に指定されなかった区域で大規模な開発が行われるのではないかという懸念もあります。島全体で成り立つ豊かな自然は、世界遺産区域だけを守っていれば保たれるわけではないのです。素晴らしい点だけでなく、そうした課題に多く言及しているのも印象的です。

（副隊長）

◆ 1800 円・Ａ５判・134 頁・**南方新社**・鹿児島・202108 刊・ISBN9784861244537

『あまのがわ』●古新舜著



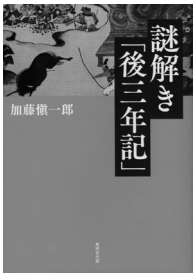
祖母と母と３人で鹿児島で暮らす史織。女性だけの太鼓の演奏団体「おごじょ太鼓」の第一人者でもある祖母の影響を受け、将来は太鼓奏者を目指していたが、母はいい顔をせず、母の仕事の都合で小学６年生で不本意ながら東京で暮らすことになる。高校２年の時、友人の自殺がきっかけで不登校になるが、祖母の入院で鹿児島へ戻り、彼女の頼みで屋久島へ向かう。

一方、種子島で生まれ育ち、宇宙飛行士になる夢を持っていた星空（せいら）は天体観測の帰りに事故に遭い、下半身が動かなくなってしまう。母は深い失意の中にいる息子に生きる希望を持ってほしいと遠隔の相手とコミュニケーションが図れる分身ロボットを入手するが、荷物の取り違えでロボットは史織の元へ。ＡＩだと思い込み、ロボットに心情を吐露する史織と、正体を明かせず会話を続ける星空だったが、やがて真実が明らかになり、ショックを受けた史織はロボットを壊してしまうが……。

本書は2019年に公開された福地桃子主演で監督でもある著者の映画のノベライズ。登場するロボット・オリヒメを開発した吉藤オリィ氏と著者が共通の友人を通して知り合い、映画が企画された。ロボットの可能性のみならず、夢、家族、人との出会いが描かれている。「心が自由なら、どこへでも行けて、なんでもできる」「奇跡は起きるものではなく起こすもの」など、著者が大切にしてきたセリフの数々が人生に輝きを与えてくれる。（Ｙ）

◆1300円・四六判・219頁・**ラグーナ出版**・鹿児島・202108刊・ISBN9784910372099

『謎解き「後三年記」』●加藤慎一郎著



『後三年記』は南北朝期に制作された『後三年合戦詞絵』の中の詞書の部分をさす。前九年合戦の様子を描いた『陸奥話記』が十一世紀に作られたのに対し、こちらは合戦から約三百年もの後に制作されたということになる。ただ最近では「後三年記」の原本が十二世紀の奥州でつくられたのではないかとの説が出ている。しかも奥州藤原氏の祖である清衡本人が作成に関与していたという。

本書は第１章で本文の記述に関する謎を、第２章で『絵詞』そのものを、第３章では合戦終焉の地金沢柵の地理的位置を考察する。ここでは本文の中身について。清衡以外の主要人物として登場するのは、まずは清衡とは腹違いである真衡だ。彼は出羽仙北主清原氏の嫡流で源義家の陸奥守として赴任に際し歓待、一致協力して清衡・家衡討伐に当たる。真衡は前九年合戦で功績のあった祖父清則のあと奥六郡主を引き継ぐが、鎮守府将軍に任命されたのは真衡ではなく貞衡という人物。果たして貞衡と真衡とは同一人物か。さらに真衡は清原一族とは何の所縁もない（著者は関係あるとみる）成衡を養子に迎え、常陸平氏の娘と源頼義との間に生れた女性を娶らせる。これが後三年合戦の引き金となる。真衡急死後、清衡と異父弟家衡とは対立するのだが、そこに突如として現れるのが、彼らの叔父の武衡。彼が家衡側につくと義家は数万騎の軍勢を差し向けたりする。強大勢力の彼も謎の人物だ。これらの疑問に対して著者独自の見解を示す。（Ｉ）

◆1400円・Ａ５判・120頁・**無明舎出版**・秋田・202107刊・ISBN9784895446693

地方小出版 流通センター　ジャンル別 新刊案内

2021年8月1日～31日
流通センター着

※各ジャンル内での出版社名は所在地の北から南の順に並んでいます。

表示されている値段は本体価格となっております。ご購入には別途、消費税がかかります。

※ジャンル【総記・事典・辞書・出版】に該当する書籍はありません

【雑誌】

◆**Ｓ－ｓｔｙｌｅ**　０９　ｖｏｌ．６８１　プレスアート編　298mm×232mm　127頁　４５０円　プレスアート［宮城］　978-4-503-22400-2　21/08

◆**歴史と文化**　第３０号　栃木県歴史文化研究会編　Ａ４　111頁　２０００円　随想舎［栃木］　978-4-88748-395-8　21/08

◆**ＧＲＥＥＮ　ＲＥＰＯＲＴ**　５００　２０２１年８月号　廣瀬　仁編　Ａ４　192頁　２５４６円　地域環境ネット［埼玉］　978-4-909864-32-1　21/08

◆**かまくら春秋**　Ｎｏ．６１５　２０２１年７月号　伊藤　玄二郎編　Ｂ６　105頁　３２７円　かまくら春秋社［神奈川］　978-4-7740-0837-0　21/07

◆**書２１**　Ｎｏ．７３　匠出版編　Ａ４　80頁　２０００円　匠出版［神奈川］　978-4-925212-82-3　21/08

◆**ＡＸＩＳ**　Ｖｏｌ．２１３　２０２１年１０月号　上條　昌宏編　297mm×225mm　152頁　１６３６円　アクシス［東京］　978-4-503-22409-5　21/10

◆**Ｂｅ！**　１４４号　Ｎｏ．１７３　今成　知美編　Ａ５　109頁　８７０円

版［京都］978-4-7803-1176-1　21/09

◆**特別報道写真集　東京オリンピック２０２０**　山陰中央新報社編　Ａ４　208頁　１８００円　山陰中央新報社［島根］978-4-87903-247-8　21/08

◆**特別報道写真集　東京オリンピック２０２０**　小泉　泰紀編　Ａ４　200頁　１５００円　佐賀新聞社［佐賀］978-4-88298-254-8　21/08

◆**特別報道写真集　東京オリンピック２０２０**　熊本日日新聞社編　Ａ４　200頁　１５００円　熊本日日新聞社［熊本］978-4-87755-625-9　21/08

◆**２０２１年版　鹿児島県高校野球データブック　白球に青春かけて**　南日本新聞社編　298mm×228mm　86頁　１３００円　南日本新聞社［鹿児島］978-4-86074-291-1　21/08

【絵本・児童書・学習参考書】

◆**紙芝居　びんぼー　びんぼう　だいはんじょう**　となみ　ゆりこ文　かみおかのりみ絵　265mm×380mm　12頁　２２７３円　子どもの文化研究所［東京］978-4-503-22402-6　21/08

◆**紙芝居　青い目の人形メリーのねがい**　宮崎　二美枝文　片岡　直子絵　267mm×380mm　12頁　１８１８円　子どもの文化研究所［東京］978-4-503-22403-3　21/08

◆**ともだち？**　うえの　よし文　さとう　のぶこ絵　210mm×182mm　36頁　１２００円　リーブル［東京］978-4-910310-02-2　21/08

◆**ゾンビハムスターねずこ**　原田　たけし文　嵯峨山　高弘絵　303mm×215mm　32頁　１４００円　リーブル出版［高知］978-4-86338-309-8　21/08

＊

第34回 地方出版文化功労賞受賞作が決定

第34回地方出版文化功労賞は、本年7月11日の最終審査会において決定した。同賞は、昨年10月28日から11月4日、米子市立図書館で開かれた「ブックインとっとり2020」に出品展示された全国の地方出版物（対象約250点）の中から、各地区の推薦委員および一般の来場者による会場での投票によりその中の10点を最終候補作として挙げ、8名の審査員が持ち回りで数カ月にわたって審査したものである。結果は以下のとおりです。

●第34回　地方出版文化功労賞

■『くまもとの戦争遺産－戦後75年　平和を祈って－』

・著者　髙谷　和生（たかたに　かずお）

・発行所　熊日出版（熊本県）、熊本県熊本市中央区世安町172、電話096-361-3274

・発行者　髙谷和生（くまもと戦争遺跡・戦争遺産ネットワーク代表）

・体裁276頁／定価2,300円＋税／発行2020年8月15日刊行

・著者略歴

髙谷和生（たかたに　かずお）氏

1954年熊本県玉名市生まれ。別府大学文学部史学科考古学専攻課程卒業。熊本県教育庁文化課にて埋蔵文化財発掘調査等を担当。主な文化財調査報告書として熊本県では『下山西遺跡』『柳町遺跡Ⅰ』等を、苓北町では『内田皿山窯跡』の報告がある。

その後は近代化遺産・近現代遺跡の報告として『子どもと歩く熊本の戦争遺跡県北編・県南編』『熊本の戦争遺跡』『熊本の近代化遺産　県央編・県北県南編』を分筆。あさぎり町『陸軍人吉秘匿飛行場』では県内初の戦争遺跡調査報告を担当する。

くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク代表。戦争遺跡保存全国ネットワーク全国運営委員。空襲・戦災・戦争遺跡を考える九州・山口地区交流会世話人。肥後考古学会幹事。ピースくまもと設立準備事務局会事務局長。

＜選考理由＞

熊本県内の戦争に関する物事を網羅的に調査した報告書である。県内の戦争遺産を軍都熊本市内の諸遺構、旧陸海軍飛行場、本土決戦施設、軍工場・軍需工場、さらに奉安殿や慰霊碑、空襲・航空資料などに分類網羅している。主な遺構については様々な資料に基づき施設の建設から戦後今日に至るまでの経緯が記載されている。現存しない捕虜収容所にも捕虜や市民の言葉とともに言及している点は特筆すべき点である。

この本の優れた点は①網羅され、整理された形で提示されていること。②図面や写真などを多用して、読む物の理解を助けている。また、平易な文章で綴られていてわかりやすい。③主な遺構について成立から現在までの経緯が記載されていること。④アメリカ公文書はじめ様々な資料を、手を尽くして収集していること。があげられる。

また、巻末のガイドマップ、戦争遺産一覧などはこれから学ぼうとする者にとって良き案内となるだろう。膨大な時間と労力を費やし、考古学の視点・方法論によりまとめられた本書は、将来にわたり戦争を語り継ぐ上での大きな財産である。

＊

●第34回地方出版文化功労賞　奨励賞

■『海の上の建築革命　－近代の相克が生んだ超技師の未来都市〈軍艦島〉－』

・著者　中村　享一（なかむら　きょういち）

・発行所　忘羊社（福岡県）、福岡県福岡市中央区大手門1-7-18、電話092-406-2036

・発行者　藤村興晴

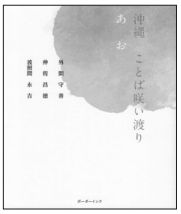
・体裁288頁／定価2,400円＋税／発行2020年9月1日刊行

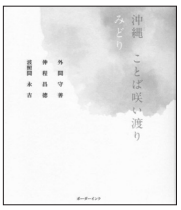
honto
ネット通販で地方・小出版流通センター扱い
本がご購入いただけます。
hontoではお客様の読書スタイルにあわせて
電子書籍でも紙の本でもご購入でき、hontoポイントは
ネットでも書店でも使えて、貯められます。
地方・小出版流通センター扱いのご当地本もネットで
ご購入いただけます。
くわしくは honto.jp へアクセスください。
honto.jp

・著者略歴
中村　享一（なかむら　きょういち）氏
1951年、長崎市飽之浦生まれ。建築家。芸術工学博士。「一宇一級建築士事務所」代表。1974年、長崎造船大学工学部建築学科卒業後、白石建設株式会社に入社。1982年、福岡市で独立し「中村建築設計室」設立。1987年、松植樹の環境保護活動「はかた夢松原の会」に発足委員として参画。1997年、九州建築塾(JIA日本建築家協会九州支部)を創設、実行委員長としてプロフェッションによる建築教育を開始。2000年、「旧長崎水族館保存再生問題」を機に、建築の臨終と再生を考える「建築再生デザイン会議」を招集し、副議長を務める。2011年、長崎市に拠点を移動。2013年、「旧長崎市公会堂」の保存再生を求め「長崎都市遺産研究会」を設立、市民運動を展開。2016年、九州大学大学院にて芸術工学博士の学位取得(「明治期三菱端島坑の形成過程に関する研究～端島から軍艦島～」)。
主な受賞歴に
1991年:JIA日本建築家協会オープンデザインコンペ銅賞(「都市の解体と再構築」)、1996年:UIA世界建築家連合バルセロナ大会公募論文「住居部門」最優秀、2003年:日本商環境設計家協会デザイン賞優秀賞(福砂屋松が枝店)、2004年:第5回JIA環境建築賞(「E7-project」、現在シェアハウス一宇邨)
＜選考理由＞
海の上の近代建築群、軍艦島。その島に建設された近代建築の一つの到達点であり、我が国最古の鉄筋コンクリート高層住宅３０号棟。それが建てられるまでの過程をたどり、明らかにした作品である。長崎、炭鉱、三菱財閥、建築家的技術者・超技師（スーパーエンジニア）などをキーワードとして多くの文献・史料をあたり、鉱山開発史、建築史、端島の環境史、労働環境など様々な視点から追求していくことによって、ル・コルビュジエが近代建築五原則を提唱する１０年前に、世界的に見ても先進的な３０号棟ができるまでの過程と様々な要因による複合産物であった事が説得力を持って提示されている。また翻って開国以来の鉱山・製鉄・建築などの歩みを理解できる本でもある。そうした点で、近年数多く出版されている軍艦島関係の本とは明らかに一線を画す作品であり、新たな視点を与えるものとして高く評価された。著者の博士論文がベースになっていることから、若干読みづらいところもあるが、優れた研究書であり、年表・図面・索引等が充実している事にも触れておきたい。

＊

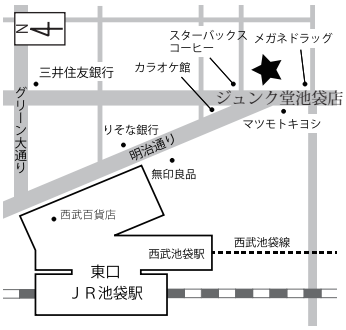
●第33回　地方出版文化功労賞　特別賞
■『沖縄　ことば咲い渡り　全3巻（さくら、あお、みどり）』
・著者　外間　守善（ほかま　しゅぜん）、仲程　昌徳（なかほど　まさのり）、波照間　永吉（はてるま　えいきち）
・発行所　有限会社ボーダーインク（沖縄県）、沖縄県那覇市与儀226-3、電話098-835-2777
・発行者　池宮紀子
・体裁各324頁／定価各2,200円＋税／発行　2020年7月7日刊行
・著者略歴
外間　守善（ほかま　しゅぜん）氏
1924年那覇市生まれ。沖縄学・言語学・琉球文学 研究などの第一人者。法政大学沖縄文化研究所長を歴任。『おもろさうし』辞典 編纂など業績多数。法政大学名誉教授。2012年没。
仲程　昌徳（なかほど　まさのり）氏
1943年テニアン島生まれ。近現代沖縄文学研究 者。『沖縄文学の一〇〇年』ほか著書多数。元琉球大学教授。
波照間　永吉（はてるま　えいきち）氏
1950年石垣市生まれ。『おもろさうし』『琉球国由来記』など琉球文学・民俗文化の研究。現在、名桜大学大学院教授。
＜選考理由＞
16～17世紀、琉球王国で編纂された歌謡集「おもろさうし」から、近現代までの様々な「うた」と「ことば」のアンソロジーである。1991年から3年4ヶ月、沖縄の地方紙沖縄タイムスに連載されたものを、このたび書籍として発行。その対象は聞声大君や琉球王をたたえ安寧を願う歌から、日々の暮らし、恋、戦後の一場面まで幅広く、また形式も多様である。もとより沖縄の言葉であるので、口承されているものなど音だけではまったく意味のわからない物も多い。そうしたものにあえて漢字を当て、また、新聞連載という制約により短いが、背景や意味のわかりやすい解説をつけることによって、うたを理解し共感するきっかけを与えてくれる。そのうえで口ずさむことによって、沖縄のうたへ近づくことができるようにも思われる。沖縄にとって郷土の文化を広く長く伝えることを可能にする地域の宝であるとともに、その外に居るわれわれが沖縄の言葉・生活・文化に触れられる好著である。





（以上、地方出版文化功労賞webサイトより）

ジュンク堂書店
淳久堂書店
池袋本店
営業時間：月～土 / 午前10時～午後11時
日・祝 / 午前10時～午後10時
池袋であなたのふるさとに帰ってみませんか？
９階「ふるさとの棚」では、
地方・小出版流通センター扱いの
ご当地本を幅広く取り揃え、皆様の
お越しをお待ちしております。
〒171-0022
東京都豊島区南池袋2-15-5
TEL　03-5956-6111
http://www.junkudo.co.jp



売行良好書

期間：2021年8月15日～9月14日
※価格は本体価格表示です。別途消費税がかかります。

［出荷センター扱い］

(1)『東西寄席演芸家名鑑２』2000円・東京かわら版　(2)『嘘つきシンちゃんの脳みそ』1000円・スーパーエディション　(3)『ゾンビハムスターねずこ』1400円・リーブル出版　(4)『武田信玄入門』1600円・山梨日日新聞社　(5)『立花隆　長崎を語る』1300円・長崎文献社　(6)『医者、用水路を拓く』1800円・石風社　(7)『琉球弧・生き物図鑑』1800円・南方新社　(8)『ぼくの沖縄＜復帰後＞史プラス　増補改訂』1200円・ボーダーインク　(9)『世界の美しい病院　その歴史』2500円・吉備人出版　(10)『情報の歴史２１』6800円・編集工学研究所　(11)『希望の一滴』1500円・西日本新聞社　(12)『＜世界＞がここを忘れても』1800円・寿郎社

［三省堂書店神保町本店　センター扱い図書］

(1)『ねむらない樹　ｖｏｌ．７』1500円・書肆侃侃房　(2)『本の雑誌 Ｎｏ．４５９ ２０２１年９月号』667円・本の雑誌社　(3)『１０代のための読書地図』1800円・本の雑誌社　(4)『東京かわら版　Ｎｏ．５７６　２０２１年８月号』545円・東京かわら版　(5)『戦国人』1600円・上毛新聞社　(6)『昭和プロレスマガジン　５５』909円・昭和プロレス研究室　(7)『戦国の北奥羽南部氏』2400円・デーリー東北新聞社　(8)『武田信玄入門』1600円・山梨日日新聞社　(9)『第１７回 京都検定 問題と解説』1400円・京都新聞出版　(10)『ニホンという滅び行く国に生まれた若い君たちへ ＯＵＴＢＲＥＡＫ アウトブレイク』1500円・白馬社

［ジュンク堂書店池袋店　地方出版社の本―センター扱い図書］

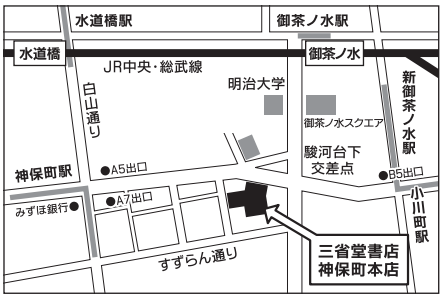
(1)『希望の一滴』1500円・西日本新聞社　(2)『ジャック リゴー遺稿集』2500円・エディションイレーヌ　(3)『戦国の北奥羽南部氏』2400円・デーリー東北新聞社　(4)『出雲王国とヤマト政権』2250円・大元出版　(5)『ぼくの沖縄＜復帰後＞史プラス　増補改訂』1200円・ボーダーインク　(6)『新　日本両生爬虫類図鑑』8000円・サンライズ出版　(7)『戦国人』1600円・上毛新聞社　(8)『戦国 安土桃山時代の池田氏』900円・日本文教出版　(9)『高校生読本　熊本市地域下水位変動』500円・熊本日日新聞社　(10)『大谷翔平　挑戦』1300円・岩手日報社　(11)『自然治癒はハチミツから』2000円・鉱脈社　(12)『医者、用水路を拓く』1800円・石風社

以下ホームページ等でも各種情報提供を行なっております。ご利用ください。
ＵＲＬ：http://neil.chips.jp/chihosho/　　ツイッター公式アカウント：@local_small

トピックス ―― ★★★

▼歴史家の色川大吉さんが９月７日老衰のため亡くなりました。96歳でした。謹んでご冥福をお祈りいたします。最期の著書となった『不知火海民衆史　上　論説篇』『不知火海民衆史　下　聞き書き篇』は八王子の揺籃社さんから刊行されたもので、本アクセス誌2021年２月号で、明治大学史資料センター研究調査員の飯澤文夫氏に紹介文を書いていただきました。この紹介文は現在はweb上で公開されており、どなたでも読むことができます。当方のホームページ冒頭の「新刊ダイジェスト」画像バナーから入っていただき、是非ご一読ください。この飯澤氏の紹介文の一節が色川さんのお仕事の本質を述べているように思われ、ここに引用させていただきたいと思います。「聞き書は、自ら表現しない人、できない人の歴史を紡ぐ有効な方法である。著者はインタビューで、聞き書は文献での確認作業を要する補助資料ではあるが、『実感として、魂として、一番大事なものは聞く相手との魂の交流です。』と述べている。民衆史という新しいジャンルを打ち立てた著者の真髄に触れる言葉だ。話者との魂の交流が成立した時、聞き書きはこんなにも豊かなものになるのかと感動する。著者が問うた近代化の意味を考え直せば、〈水俣〉はまだ終わっていない。」

＊

地方・小出版物のデータになります。綴じて保存してください。

三省堂書店 BOOKS SANSEIDO
営業のごあんない
神保町本店 ４階
地方出版・小出版物フロア
営業時間　10：00 AM～8：00 PM
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-1
TEL. 03-3233-3312(代)
URL. http://www.books-sanseido.co.jp
本店4階売場では、地方・小出版流通センター扱いの新刊全点のほか、地域別に書籍を取り揃えております。また、地域ならではのタウン誌、趣味の雑誌も扱っております。